

【実践事例1】

《第三学年》

領域「C読むこと」

場面の移り変わりと結び付けて、登場人物の気持ちの変化を具体的に想像するために

言語活動

登場人物の心情を絵で表す。

1 学習材

『月へ行くはしご』（学力診断第三学年）問題文

2 ねらい

○ 複数の叙述に根拠を求めながら、登場人物の気持ちの変化を具体的に想像することができる。

3 学習活動の流れ

- 一 学習の見通しをもつ。
- 二 考えの根拠を叙述から見付けながら、場面ごとのけい子の心配度を可視化する。
- 三 「だいじょうぶよ」と言い聞かせているけい子の気持ちについて、考えを交流する。

4 学習活動の実際

一 学習活動の見通しをもつ。

はじめに、「場面の移り変わりと結び付けて、登場人物の心情を具体的に想像する」という学習課題を提示し、児童が目的意識や見通しをもって学習に取り組めるようにした。

次に、学習材『月へ行くはしご』の全文を読み、物語のあらすじを確かめた。まず、「うさぎはお月さまが大すき」であり、「お月さまもうさぎが大すき」だと言ったひいおばあさんの台詞を板書することで、この物語を動かすきっかけとなる設定をしっかりとおさえられるようにした。そして、全文を

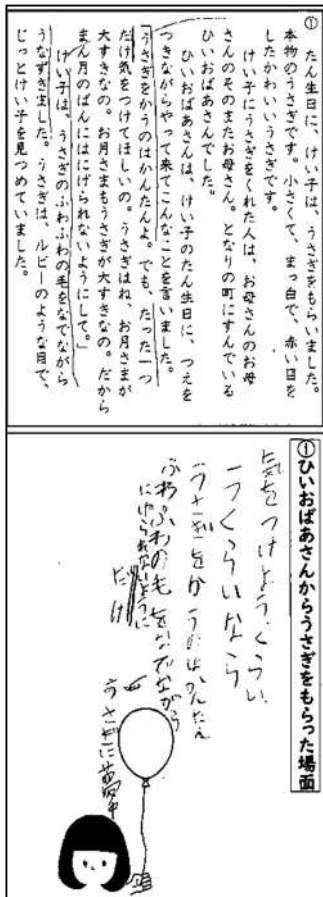
- ① ひいおばあさんからうさぎをもらった場面
- ② お月見の日にお月さまがのぼった場面
- ③ にわのうさぎ小屋へ行った場面
- ④ うさぎを家の中へ入れた場面
- ⑤ その夜けい子がねむりにつく場面の五つの場面に分けた。

二 考えの根拠を叙述から見付けながら 場面ごとのけい子の心配度を可視化する。

場面ごとのけい子の心情、特に心配する気持ちを捉えていくにあたり、学習シート①を活用した。

まず、けい子の心情が読み取れる叙述を見付け、線を引かせた。そして、その時のけい子の心配度を風船の大きさと表すようにした。また、それぞれの場面で、なぜ風船をその大きさにしたのか、考えを交流させた。その際には、叙述に立ち返るため、その根拠となる叙述を示しながら発言させるようにした。

第一場面では、『たった一つだけ気をつけてほしい』と書いているから、一つくらいなら気をつけられるかな、という気持ちだと思う。』や、『うさぎのふわふわの毛をなでながら』と書いているから、この時は心配というように、うさぎに夢中だと思う。』といった意見が出た。【資料1】



【資料1】第一場面の心配度を表す風船

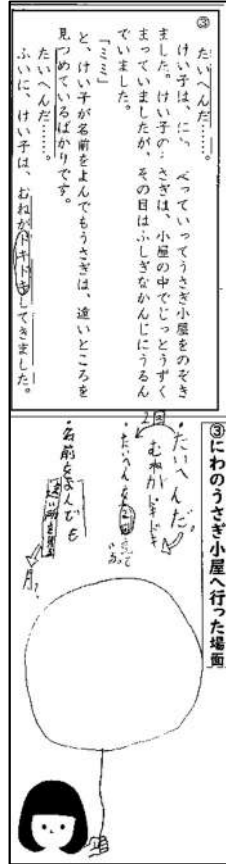
第二場面では、『少し心ばいでした』が、『もっと心ばいになりました』になっているから、心配度は大きくなっていると思う。』や、『大きなまんなの月がのぼったとき』とあるから、月があまりに大きくなって、ひいおばあさんの言ったことが本当かもしれないという気持ちになったと思う』と考え

た児童が多くいた。そのような理由から、心配度を表す風船は少し大きくなつた。【資料2】



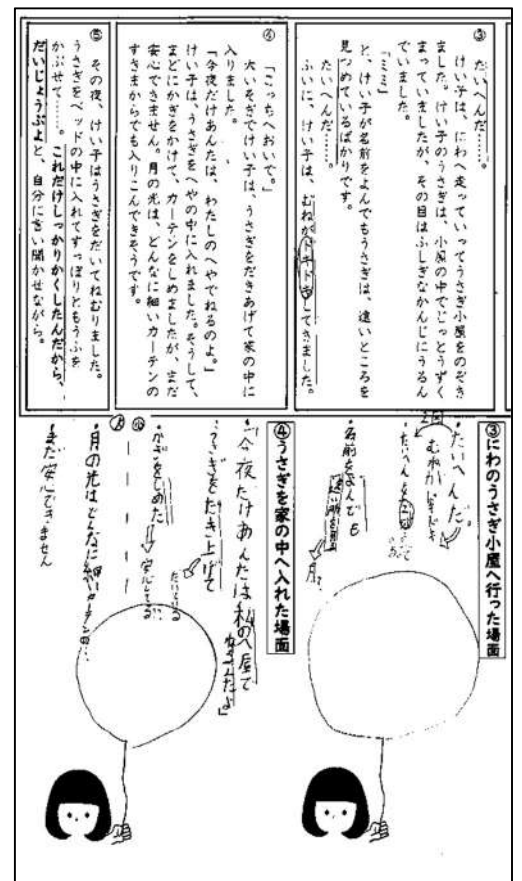
【資料2】第二場面の心配度を表す風船

第三場面では、『たいへんだ』がくり返されているから、心配度がさらに大きくなっていると思う。『遠いところ』というのは月だと思う。うさぎが月を見つめていて、もつと心配になつたと思う。」などの意見が出され、心配度を表す風船がますます大きくなつた。

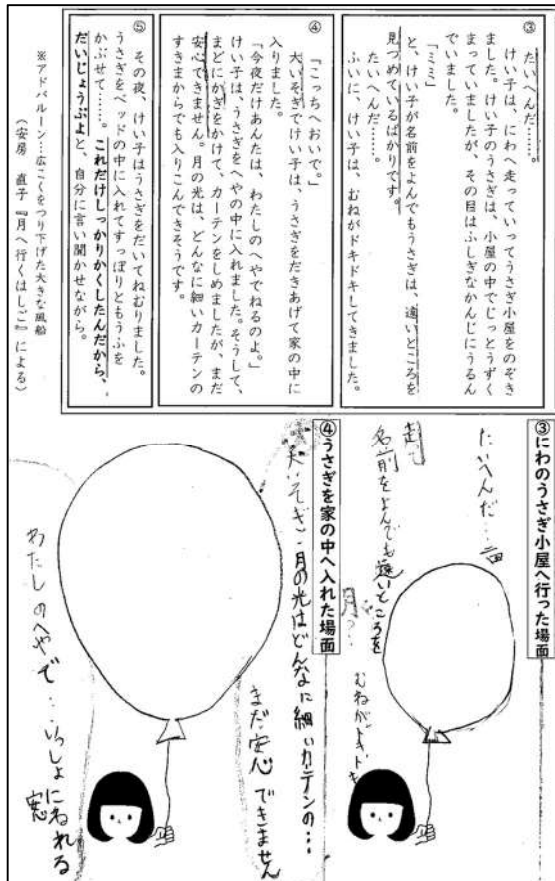


【資料3】第三場面の心配度を表す風船

第四場面では、風船は少し小さくなると考えた児童と、大きくなると考えた児童がいた。少し小さくなると考えた児童は、「部屋の中に入れて、まだにかぎもかけたから、いっしょにいれば安心と思つて、少し安心していると思う。」と考えていた。【資料4】一方、大きくなると考えた児童は、「部屋へ入れたことで安心したかもしれないけれど、その後『が、まだ安心できません。月の光は…』とあるから、やつぱりまだ心配な気持ちは小さくならないと思う。」と考えていた。【資料5】



【資料4】風船が小さくなると考えた児童



【資料5】風船が大きくなると考えた児童

どの児童も、叙述を基に、それぞれの場面でのけい子の心情を具体的に想像することができていた。特に第四場面では、考えが二つに分かれたが、叙述から考えの根拠を示したことで、違った考えをもっていた児童も「なるほど」と相手の考えに共感することができた。

三 「だいたいようぶよ」と言い聞かせているけい子の気持ちについて、考えを交流する。

第五場面では、学習シート②を活用して「だいたいようぶよ」と言い聞かせていたけい子が、どんなことを思いながらねむりについたのかを考えさせた。その時、一から四場面の心配度の変化を手掛かりに理由とともに考えさせた。すると、多くの児童がそれまでの場面とのつながりを意識しながらけい子の言動を根拠に考えることができた。【資料6、7、8】

また、「言い聞かせながら」という表現は、特に着目させたいところであった。初め、「これだけしっかりかくしたんだから、もうだいたいようぶ」という叙述から、心配な気持ちがなくなっているかのように読んでいた児童も、考えを交流したとき、『言い聞かせながら』という表現がけい子の気持ちを表している。」と指摘されたことで、まだ心配な気持ちのままのけい子の心情を想像するに至った。

その夜、けい子はうさをだいてねむりました。うさをベッドの中に入れてすっぽりともうぶをかぶせて……。これだけしっかりかくしたんだから、だいたいようぶよと、自分に言い聞かせながら。

けい子は不安、心配になったと思いつ。なぜなら、不安じゃなかったらうさぎをだいてねむれないと思う。心配だからうさぎをとられないようにねたと思いつ。心配、不安が大きくなると思いつ。

「だいてねむりました」という表現を根拠に、けい子の心配な気持ちを想像することができた。

【資料6】第五場面のけい子の心情 (A児)

その夜、けい子はうさをだいてねむりました。うさをベッドの中に入れてすっぽりともうぶをかぶせて……。これだけしっかりかくしたんだから、だいたいようぶよと、自分に言い聞かせながら。

お月見の日にお月さまがのぼる。たまたまあんなりのうさぎもらうからねと、言っているよりに思。て少しこわかった。うさを家の中へ入れた時、お月さまはみんなに細いカーテンのすきまからでも入りこんできやうだと思。たけい子はうさがお月にのぼるかもと思。てねえれなかつた。私は思。いました。けい子の心配度は風船で表すこと。でも大きな風船です。

それまでの複数の叙述と風船の大きさを手掛かりに、最後のけい子は心配で「ねむれない」ほどだったと想像することができた。

「言い聞かせながら」という表現に着目するとともに、「だいたいようぶだと思いたい」けい子の心情まで想像を深めることができた。

その夜、けい子はうさをだいてねむりました。うさをベッドの中に入れてすっぽりともうぶをかぶせて……。これだけしっかりかくしたんだから、だいたいようぶよと、自分に言い聞かせながら。

①だいたいようぶよと、自分に言い聞かせながら。②絶対にくさ(き)を月には行かせたくはない。③「だいたいようぶよと、自分に言い聞かせながら」。④「だいたいようぶよと、自分に言い聞かせながら」。⑤「だいたいようぶよと、自分に言い聞かせながら」。⑥「だいたいようぶよと、自分に言い聞かせながら」。

【資料8】第五場面のけい子の心情 (C児)

【資料7】第五場面のけい子の心情 (B児)

5 取組を終えて

今回の取組では、登場人物の「心配度」を可視化するために風船で表現させたことで、場面の移り変わりとともに増幅していく登場人物の心情を具体的に想像することができた。【資料9】また、自分の言葉で表現することが苦手の児童にとっても、絵で表すという活動は取り組みやすく、進んで風船の大きさを考えることができた。さらに、登場人物の気持ちを想像するための根拠となる叙述に線を引かせたことで、より具体的な心情の想像につながった。

併せて、根拠となる叙述に線を引かせたことは、考えを交流する際に「〜と書いているから、〜だと思う。」という伝え方ができ、より説得力のある発言をすることにつながった。児童のふり返りからも、「文章から証拠を見付けながら読んでいきたい。」という気付きを得ている様子が伺われた。





このように、叙述に立ち返り、登場人物の心情を具体的に想像しながら読む力を付けさせていくことは、高学年で人物像や物語などの全体像を具体的に想像することにつながっていくと考える。今後も、物語全体を見通して、複数の叙述を基に登場人物の行動や気持ちを捉え、その気持ちの変化について具体的に想像しながら読むことを大切にし、物語を読み味わせていきたい。

「月へ行くはし」①

○ けい子の心ばい度、風船の大きさをあらわそう。

名前

<p>① たん生日に、けい子は、うさぎをもらいました。本物のうさぎです。小さくて、まっ白で、赤い目をしたかわいいうさぎです。 けい子にうさぎをくれた人は、お母さんのお母さんのおばあさん。となりの町にすんでいるひいおばあさんでした。 ひいおばあさんは、けい子のたん生日に、つえをつまなからやっ来て、けんことを言いました。「うさぎをかうのは、あんたよ。でも、たった一つだけ気をつけてほしいの。うさぎはね、お月さまが大好きなの。お月さまもうさぎが大好きなの。だからまん月のばんにはにげられないようにして。」 けい子は、うさぎのふわふわの毛をなでながらうなずきました。うさぎは、ルビーのような目で、じっとけい子を見つめています。</p>	<p>② 秋のお月見の日がきました。けい子の家のまどには、おだんごやすずきやりんどうの花がかざられました。けい子は、少しはしゃいで、お月見の空に大きなまんまるの月がのぼったとき、けい子は、もつとほはになりました。のぼりたての月は、ももの赤のような色をして、アドバルーンのように大きかったです。あんなのうさぎもうちからね……。 うさぎも色の月は、けい子を見つめて、そう言っていましたように思われました。</p>	<p>③ けい子は、にわへ行ってうさぎ小屋のぞきました。けい子のうさぎは、小屋の中でじっとうずくまっています。その目はふしぎなかんじにうるんでいます。 「Wow」 ど、けい子が名前をよんでもうさぎは、遠いところを見つめているばかりです。 けい子は、お月見の日がきました。</p>	<p>④ 「おうちへおいで。」 ひいおばあさんがけい子に、うさぎをだきあげて家の中に入りました。 「今夜だけあなたは、わたしのへやでねるのよ。」 けい子は、うさぎをへやの中に入れました。お月見までこのお月見を連れて、カーテンを閉めました。まだうさぎがうなずいてはいるけれど、うさぎは、お月見の光は、どんなに細いカーテンのすきまからでも透りこみます。</p>
--	--	---	--

<p>① ひいおばあさんからうさぎをもらった場面 たれを付けとかなれと。 つくらうらうら</p> 	<p>② お月見の日にお月さまがのぼった場面 うさぎお行、てしまつ。 本当にオンヤれろ。</p> 	<p>③ にわのうさぎ小屋へ行った場面 ニわり、あそび、まう。</p> 	<p>④ うさぎを家の中へ入れた場面 大きいおまぎ 安心できまけり</p> 
--	--	---	---

※アドバルーン：広くをつり下げた大きな風船
(安房 直子「月へ行くはし」による)

「月へ行くはじ」①

○ けい子の心ばい度を、風船の大きさをあらわそう。

名前)

① たん生日に、けい子は、うさぎをもらいました。本物のうさぎです。小さくて、まっ白で、赤い目をしたかわいいうさぎです。
けい子にうさぎをくれた人は、お母さんのお母さんのそのまたお母さん。どりの町にすんでいるひいおばあさんでした。
ひいおばあさんは、けい子のたん生日に、つえをつきながらやって来て「こんなことを言いました。「うさぎをかうのはかんたんよ。でも、たった一つだけ気をつけてほしいの。うさぎはね、お月さまが大すきな。お月さまもうさぎが大すきな。だからまん月のばんにはにげられないようにして。」
けい子は、うさぎのふわふわの毛をなでながらうなずきました。うさぎは、ルビーのような目で、じっとけい子を見つめていました。



② 秋のお月見の日がきました。けい子の家のまどには、おだんこやすさやりんどうの花がかざられました。けい子は、少し心ばいでした。東の空に大きなまんまるの月がのぼったとき、けい子は、もった心ばいになりました。のぼりたての月は、ももの寒さのような色をして、アドバルーンのように大きかったです。あんなのうさぎをもうからね……。うすもも色の月は、けい子を見つめて、そう言っているように思われました。

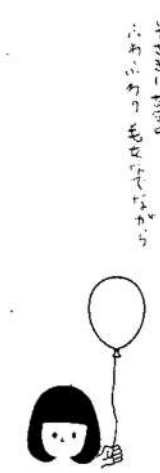
③ たいへんだ……。けい子は、にわへ走って行ってうさぎ小屋のぞきましました。けい子のうさぎは、小屋の中でじっとうずくまっています。その目は、ふしぎなかんじにうるんでいます。「んんん」どけい子が名前をよんでもうさぎは、遠いところを見つめていてはかりです。ふいに、けい子は、お母さんがおどおどしてききました。

④ 「こっちへおいで。」大きいうさぎでけい子は、うさぎをだきあげて家の中に入りました。今夜だけあなたは、わたしのへやでねるのよ。」けい子は、うさぎをへやの中に入れました。そうして、まどにかき窓かけで、カーテンを締めましたが、まだ安心できません。月の光は、どんなに細いカーテンのすきまからでも入りこんできそうです。

⑤ その夜、けい子はうさぎをだいてねむりました。うさぎをヘッドの中に入れてすっぽりともうかぶかぶせて……。これだけすっきりかかしたんだから、だいじょうぶだと、自分に言い聞かせながら。

※アドバルーン…広くをのり下げた大きな風船 (安房 直子「月へ行くはじ」による)

①ひいおばあさんからうさぎをもらった場面
きょうは「けい子」の場面
うさぎをかうのはかんたん
うさぎをなでなでしてはから



②お月見の日にお月さまがのぼった場面
お月見の日が ↓ かいおばあさん
お月見の日、うさぎをもらってしまふ
あんなのうさぎをもうからね



③にわのうさぎ小屋へ行った場面
えい、えい、えい
うさぎをのぞいて
うさぎをだきあげて
うさぎをだきあげて
うさぎをだきあげて



○ けい子の心ばい度を、風船の大きさをあらわそう。

① たん生日に、けい子は、うさぎをもらいました。本物のうさぎです。小さくて、まっ白で、赤い目をしたかわいいうさぎです。

けい子にうさぎをくれた人は、お母さんのお母さんのそのまたお母さん。となりの町にすんでいるひいおばあさんでした。

ひいおばあさんは、けい子のたん生日に、つえをつきながらやって来てこんなことを言いました。

「うさぎをかうのはかんたんよ。でも、たった一つだけ気をつけてほしいの。うさぎはね、お月さまが大すきな。お月さまもうさぎが大すきな。だからまん月のぼんにはにげられないようにして。」

けい子は、うさぎのふわふわの毛をなでながらうなずきました。うさぎは、ルビィのような目で、じっとけい子を見つめていました。

② お月見の日にお月さまがのぼった場面



② 秋のお月見の日がきました。

けい子の家のまどには、おだんごやすすきやりんどうの花がかざられました。

けれども、その日

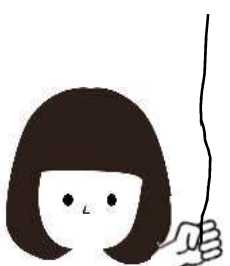
けい子は、少し心ばいでした。

東の空に大きなまんまるの月がのぼったとき、けい子は、もっと心ばいになりました。のぼりたての月は、ももの実のような色をして、アドバルーンのように大きかったのです。

「あんたのうさぎもらうからね……。」

うすもも色の月は、けい子を見つめて、そう言っているように思われました。

③ にわのうさぎ小屋へ行った場面



③ たいへんだ……。

けい子は、にわへ走って行ってうさぎ小屋をのぞきました。けい子のうさぎは、小屋の中でじつとうずくまっていたましたが、その目はふしぎな感じにうるんでいました。

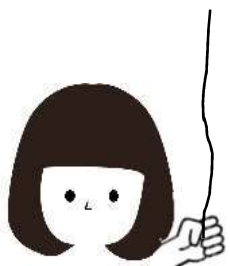
「ミミミ」

と、けい子が名前をよんでもうさぎは、遠いところを見つめているばかりです。

たいへんだ……。

ふいに、けい子は、おねがドキドキしてきました。

④ うさぎを家の中へ入れた場面



④ 「こっちへおいで。」

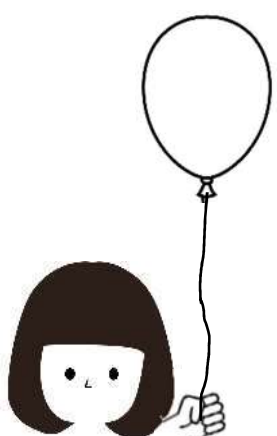
大いそぎでけい子は、うさぎをだきあげて家の中に入りました。

「今夜だけあなたは、わたしのへやでねるのよ。」
けい子は、うさぎをへやの中に入れました。そうして、まどにかぎをかけて、カーテンをしめました。まだ安心できません。月の光は、どんなに細いカーテンのすきまからでも入りこんできそそうです。

⑤ その夜、けい子はうさぎをだいてねおりました。

うさぎをベッドの中に入れてすっぽりともうふをかぶせて……。これだけしっかりかくしたんだから、だいじょうぶよと、自分に言い聞かせながら。

① ひいおばあさんからうさぎをもらった場面



※アドバルーン：広くをつり下げた大きな風船

(安房 直子『月へ行くはしご』による)

○「だいじょうぶよ」と言い聞かせていたけい子は、どんなことを思いながらねむったでしょう。

その夜、けい子はうさぎをだいてねむりました。
うさぎをベッドの中に入れてすっぽりともうふを
かぶせて……。これだけしっかりかくしたんだから、
だいじょうぶよと、自分に言い聞かせながら。

